

## (8) チョウ目チョウ類

### 選定・評価方法の概要

東京都のチョウ類は、疑問種を除くと2022年までに144種が記録されており、このうち本土部では134種が確認されている。その本土部における科ごとの種数の内訳は、アゲハチョウ科13種、シロチョウ科11種、シジミチョウ科38種、タテハチョウ科54種、セセリチョウ科18種となっている。この中で前回の2010年版レッドリストにて選定された本土部全体（区部、北多摩、南多摩、西多摩、本土部）のチョウ類の種数は、アゲハチョウ科4種、シロチョウ科2種、シジミチョウ科20種、タテハチョウ科（テングチョウ亜科、ジャノメチョウ亜科を含む）17種、セセリチョウ科7種の合計50種であった。また、この前回の評価は定性的基準によってのみ行われ、本土部のみ結果は絶滅（EX）12種、絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）2種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）3種、準絶滅危惧（NT）1種、情報不足（DD）6種と判定されている。

今回の改定作業では、過去の文献による情報収集と本レッドリスト担当者・協力者による最新の野外調査データから初めて全選定種を定量的基準に基づいて評価した。また、過去30年以上記録がない種を絶滅（EX）と判定した。定量的基準については、2000年代以降の区市町村からの記録を現存生息区市町村数とし、明治期～現在の既知生息区市町村数とこの現存生息区市町村数との割合を減少率とみなして、更に産地の分断程度及び環境・生息状況、過去10年間の減少度、今後10年間の状況予測、種の移動能力の5項目を加味することで算出する補正減少率の値を用いて判断した。ただし、一部の種（ウラゴマダラシジミ、オオムラサキ）では定量的基準に当てはめると想定以上にランクが高くなる状況が見られたが、これは絶滅している数の多い区部があまりに狭くかつ細かく分割されている一方で、現存する多摩西部などの市町村では生息面積が広く個体数も多いため、実際にはそこまで高ランクにないところからくるギャップが評価として表れている。したがって、これらの種ではより現状の評価に適合する定性的基準のみで評価した。また、最近になってウラギンヒョウモンが複数種に分割され、このうちサトウウラギンヒョウモンとヤマウラギンヒョウモンの2種が東京都にも生息すると考えられるが、過去の記録の同定が判別できないため、本書ではこれらを区分せず、従来通りウラギンヒョウモンを1種として扱った。なお、本解説版（本土部レッドデータブック2023）の作成時に、コヒョウモンモドキの標本が見出され、新たに1種の追加を行った。

### 選定・評価結果の概要

今回の評価の結果、本土部レッドリスト2010で対象外となっていた種が新たに26種追加された一方で、前回の掲載種であるウスバアゲハ（ウスバシロチョウ）、ミズイロオナガシジミ、コムラサキの3種は近年の分布拡大により掲載種から外れた。改定で取り上げたレッドリスト掲載種は、アゲハチョウ科3種、シロチョウ科4種、シジミチョウ科23種、タテハチョウ科（テングチョウ亜科、ジャノメチョウ亜科を含む）28種、セセリチョウ科16種の合計74種に及んだ。前回と比較すると、アゲハチョウ科では1種減少したが、シロチョウ科では2種、シジミチョウ科では3種、タテハチョウ科では11種、セセリチョウ科では9種が差し引きで増えたことになる。

本土部に着目すると、絶滅（EX）の判定は14種で、明治期の標本が発見されたチャマダラセセリと近年全国的に減少が著しいウラギンシジミヒョウモン、1980年代の標本が見出されたコヒョウモンモドキの3種が新たに加わったが、いずれも草原性の絶滅危惧チョウ類である。他の絶滅種では、同様に草原・湿地帯を生息地とするヒメシロチョウ、ヒメシジミ、アサマシジミ、オオウラギンヒョウモン、ホシチャバネセセリ、コキマダラセセリ、アカセセリ、河川敷に依存するミヤマシジミやシルビアシジミ、さらには人の手で管理された里山環境を好むギフチョウやクロシジミが挙げられる。いずれも開発・改修や管理放棄、農業形態の変化などの影響を受けやすい環境に生息していたチョウ類で、高度経済成長期の煽りを受けて衰退、絶滅に至ったと考えられる。



二ホンジカの食害を受けた山地の草地（雲取山）



シカ食害の影響を受けやすいヘリグロチャバネセセリ

絶滅危惧ⅠA類（CR）の判定はスジグロチャバネセセリ、ツマグロキチョウ、アサマイチモンジの3種で、やはり河川改修や里山放棄による影響を受けやすいチョウ類である。絶滅危惧ⅠB類（EN）は8種で、草原性のヘリグロチャバネセセリ、ヤマキチョウ、スジボソヤマキチョウ、ギンボシヒョウモンの他、山地の雑木林を好むムモンアカシジミや森林・渓谷性のキバネセセリ、カラスシジミ、ツマジロウラジャノメが加わる。また、同じく森林・渓谷性のジョウザンミドリシジミとフタスジチョウの2種が情報不足（DD）として判定されたが、前者は生息地の樹冠が高くなって調査困難に陥ったこと、後者は1979年の幼虫による奥多摩町での1例のみであることによる。また、今回の評価には加えなかったが、戦前にはミヤマカラスシジミの記録も1例あり、食樹を同じくするスジボソヤマキチョウは多摩西部で時々記録されるために本種が生息していてもおかしくなく、判定すれば情報不足（DD）として扱うことができる。残りの絶滅危惧Ⅱ類（VU）では14種、準絶滅危惧（NT）では18種が選定された。これらの結果から前回と比較すると、絶滅（EX）では1種、絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）では9種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）では11種、準絶滅危惧（NT）では17種が増加したことになる。全体の傾向として、東京都本土部では宅地開発や管理放棄等により区部や隣接した多摩東部を中心に絶滅または絶滅寸前となっている平地・低山性の種が多く見られるが、最近では二ホンジカの激増による食害（過剰採食）の影響で急速に減少した山地性チョウ類が現れ始めたことが注目される。これはチョウ類だけでなく他の植食性昆虫にも共通する新たな脅威が生じたと言える。また、ホシミスジ近畿低地亜種や中国原産アカボシゴマダラのような外来チョウ類の侵入、拡大による在来種・在来亜種への影響も今後の深刻な問題として懸念されるだろう。

（矢後 勝也）

### 写真提供者

杉村健一、田畑伊織